



日本「アジア英語」学会(JAFAE)

ニューズレター

No. 8 (January 2001)

第 8 回 全国大会、中京大学で開催

日時: 2000年12月16日(土)
10:00~17:45
会場: 中京大学

大会をふりかえって

津田早苗(東海学園大学)

第8回全国大会は、12月16日、名古屋市東部八事(やごと)にある中京大学で開催され、20世紀の終りを飾るにふさわしい大会となった。午前中は開会行事、名古屋商科大学のProfessor Euginius Sadtonoの特別講演に続き、会員総会が開催された。

午後は5件の研究発表で始まった。中京大学の西雅右氏は「Intercultural Literacyの観点から見たSingaporeの英語分析」と題してLiteracyの見地からシンガポールの言語事情を分析し、民族構成と母語の尊重、国家目的と英語の選択との関係を説明した。

続いて、「日本の英語学習参考書における未来時制の問題点」で青山学院大学の岡裏佳幸氏は、学習参考書が時制習得に関して学習者を混乱させていることを指摘し、日本人の英語に必要な基本的時制表現は何かについて試論を述べた。

国際基督教大学Jie Shi氏は、「Bilingual Education of Children - A Case Study of a Saturday Afternoon School by Parents」で、二言語を使用する環境を維持するために週末に行ってきた活動の報告と二言語教育の目的、社会的ニーズなどの多様性に対する認識の必要性について述べた。

北陸学院短期大学の後藤田遊子氏は「モンゴルにおける中等学校英語教育元ロシア語教員のための英語教員養成と新英語教員への課題」で、モンゴルの政治変化に対応する言語政策の転換について、英語教育重視の政策と教員養成について現地調査に基づき報告をした。

名古屋商科大学のThai Duy Bao氏は「Special Issues of the Teaching of Speech Etiquettes」と題して、ある言語の定形表現が異なる文化では、違った意味を持つことを指摘し、言語教育にそのような知識を含める重要性を指摘した。

「インドの最新英語事情」と題するシンポジウムは、金沢経済大学の河原俊昭氏の司会で、青山学院大学の本名信行氏、秋田県立大学の榎木蘭鉄也氏、清泉女子大学の谷田恵子氏が学会のインド言語事情視察の成果をふまえてそれぞれの発表をした。本名氏はインド英語の特徴を述べ、多様性こそが世界共通の英語の特徴であると説明した。榎木蘭氏はインド英語の発音、語彙、文法的特徴について述べた。谷田恵子氏は英語で書かれたインド文学の発展の過程について説明した。今回のシンポジウムはそれぞれの講師が、インド英語の異なる側面について現地調査をもとに明ら

第8回全国大会プログラム

- 大会総合司会 福吉瑛子(中京大学)
 10:00 開会の辞: 境賛三(中京大学)
 会長挨拶: 本名信行(青山学院大学)
 大会校代表挨拶: 片山厚(中京大学文学部長)
- 10:10-11:40 特別講演:
 Prof. Euginius Sadtono(名古屋商科大学)
 "Program Evaluation of Foreign Language Education"
- 11:40-12:00 会員総会(司会:田嶋ティナ宏子)
 (12:00-13:30 昼食休憩)
 13:30-15:45 研究発表
 司会:高本裕迅(白百合女子大学)
1. 「Intercultural Literacyの観点から見たSingaporeの英語教育分析」 西雅右(中京大学)
 2. 「日本の英語参考書における未来時制の問題点」 岡裏佳幸(青山学院大学)
 3. "Bilingual Education of Children - A Case Study of a Saturday Afternoon School by Parents" Jie Shi(国際基督教大学)
 4. 「モンゴルにおける中等学校英語教育 - 元ロシア語教員のための教員養成の現状と英語教員への課題」 後藤田遊子(北陸学院短期大学)
 5. "Special Issues of the Teaching of Speech Etiquettes" Thai Duy Bao(名古屋商科大学)
- 16:00-17:45 シンポジウム
 テーマ:インドの最新英語事情
 司会:河原俊昭(金沢経済大学)
 発題:
 本名信行(青山学院大学)
 「インド英語の社会言語学的状況」
 榎木蘭鉄也
 「インド英語の特徴」
 谷田恵子(清泉女子大学)
 「インドの英語文学」
 閉会の辞: 津田早苗(東海学園大学)
 18:00 懇親会

かにしたもので、内容豊富で画期的なシンポジウムであった。

中京大学片山文学部長、境、福吉各委員をはじめ中京大学関係各位の熱意と学会事務局の協力により、活発な質疑応答のある大会の幕を閉じることができた。

特別講演: Program Evaluation of Foreign Language Education

三宅ひろ子(青山学院大学)

第8回全国大会の午前中は、Euginius Sadtono教授(名古屋商科大学)による特別講演"Program Evaluation of Foreign Language Education - Language Program Evaluation and its Attendant Problems"が行われ、会場はその内容とユーモアを交えたお話で大変盛り上がった。

講演の冒頭でSadtono教授は、「language programを正しく評価することは大変難しいが、より良いprogramを作るためにはとても大事なことである」と、language programを評価することの目的と、その重要性について述べられた。

language program evaluationは1960年代頃に誕生した比較的新しいフィールドであり、まだまだ多くの問題点を抱えていると言う。評価者(内部の人間が評価するのか、外部の人間が評価するのか、それとも両者が評価するのか)、評価方法(量的方法か、質的方法か、両方か)、評価基準(人によって分析方法が異なるがどうするのか)、スポンサー、時間、お金といった問題が次々と挙げられていったが、この講演では特に評価方法と評価基準の2つに重点が置かれていた。

Sadtono教授によると、まず評価方法については、量的・質的方法の両方をうまく使い、評価基準については、複数の人間による評価・分析の中から"similarities for decision making(判断の類似点)"を引き出すのが良いという結論であった。この結論に納得すればするほど、講演冒頭でのSadtono教授のお言葉が頭の中を駆けめぐり、評価の難しさを痛感した。

この講演で一番印象に残っているのは、Sadtono教授が何度も強調されていた"There is no one truth to be discovered by evaluation, rather a multitude of 'truths' or interpretations (J. Charles Alderson)."というお言葉である。学生や教師の立場にある(あった)者なら誰もが、この一文には考えさせるものがあつたのではないだろうかと思う。

今回の特別講演では、インドネシア、アメリカ、シンガポールなど、さまざまな国の大学・大学院で教鞭をとってこられたSadtono教授が、御自身の経験にもとづいてlanguage program evaluationの問題点を挙げられたからこそ、聴衆が充実した時間を過ごせたように思う。また、講演内容の面白さもさることながら、OHPIに写し出されるユーモアたっぷりの絵に、聴衆の多くが惹き付けられたのではないだろうか。私もこれまで数々の講演を聞いてきたが、今回の講演は特に出色であつたと思う。

ELT in India: A Perspective

Deepshikha Mahanta

(Central Institute of English and Foreign Languages, Hyderabad, India)

Though India is a land of one official language (Hindi) and some sixteen hundred other languages, it is English that functions as the link language in this country. English came to India as the Colonial language. But it has turned into the language of education, media, research, and slowly it is becoming the first language of children of different language speaking parents.

ELT in India has a considerably long history. English was made the language of education in 1835 by the colonizers. In the post-independent era (1947-) several educational plans and commissions have been implemented and re-implemented, all of which have a different perspective concerning what the language of instruction should be. The general picture right now is as below:

- 1) A child can start its academic career either in English or in one of the Indian languages recognized by the Constitution of India.
- 2) Education in the Indian language can be pursued from nursery level up to the university level. But during the first ten years of schooling, a child must have English as a subject for at least five years. Different states adopt different policies here.
- 3) After ten years of schooling a student has to join a college. Here courses are broadly divided into Arts, Science and Commerce streams, and English forms an obligatory course component in all the three.
- 4) After 10+2 years of education, if a student goes for purely technical education (like medical science, etc) English no longer remains a course component but the language of instruction.
- 5) If a student joins humanities, English remains a core subject up till graduation (up till the 15th year of academic learning).
- 6) At the level of Master's degree, English becomes just an optional choice of medium for everybody except the people who specialize in English.
- 7) At research level, English is an optional medium.
- 8) The method of teaching generally followed now is Communicative Language Teaching (or a mixture of Structural and Communicative).
- 9) An overall 60% gives a first class/division; 45-59.9% is a second class; below that (in some states up to 30% and elsewhere up to 40) is simple pass. The CIEFL follows grading system in a scale of ABCDE, where A is a 'distinction' and E is a failure.
- 10) The Central Institute of English and Foreign Languages, three Regional Institutes of English, and eight English Language Teaching Institutes are there in the country to give training to English teachers. The CIEFL also gives ESP courses of shorter/longer duration covering a wide range of people from pilots to housewives.
- 11) There are lots of privately-run institutes coming up every day, especially to cater the ever-increasing need for fluency in English.

12) Though the ideal posited is British/American English, most of the people end up learning a kind of Indian English — at best of International intelligibility; at worst, a bad mixture of bookish English and one of the Indian languages.

インド研修ツアー—雑感

河原俊昭(金沢経済大学)

昨年9月、インド研修旅行団の一員として、ムンバイ、ハイドラバード、デリーと三都市を訪れた。10日ほどの滞在であったが、自分にとり、初めてのインドだったので、印象深い訪問となった。そこで感じたことを少々報告してみたい。

デリーで、オートリキシャというバイクを車に改造したような乗り物に乗った。感心したのは、どんな短時間の信号待ちでも、運転手がエンジンを止めることである。一行を運んでくれた小型バスも、我々が買い物などで、ちょっとバスから離れる時は、運転手がエンジンとエアコンを切る。ガソリンを一滴でも節約しようという態度である。日本ならば、運転手はエアコンをつけっぱなしであろう。

ハイドラバードのCIEFLでは、様々なセミナーに参加した。セミナーは先生方の研究室で行われたが、意外だったのは、どの研究室にも本がほとんどないことであった。先生方の自宅でも本は少ないそうである。日本では、大学院生でも何千円かの本を平気で買い、下宿は本で山積みということもある。その点、インドの先生と学生は図書館を最大限に活用している。CIEFLの図書館には様々な本があったが、ほとんどが何度も読まれたらしく手垢で汚れていた。図書館で一心不乱に読書している人々を見ると、気合いが入っていることが分かる。手元に本がないというハンディにもかかわらず、CIEFLの教授や学生たちには独創的な研究が多いと聞く。エアコンのきいた部屋に、ほとんどの本を「つんどく」だけ、という日本の研究者は大いに恥じるべきだろう。

情眼をむさぼっている日本の将来危うし、と強く感じたことがあった。ある日、一行はパラシャ教授の家に招待された。教授の弟子も数名来ていたが、そこで、コンピュータに詳しい青年と話しをする機会があった。彼は分かりやすい英語で、インドでは自国の英語力をいかしてソフト開発が盛んであり、外国からも注文が殺到して、この国の経済発展のきっかけになっている、と教えてくれた。若くて柔軟な頭脳、英語力、パソコンの3つが揃えば、ソフト開発は可能であり、インドのシリコンバレーと呼ばれるバンガロールという都市が急成長していると言う。彼の話を聞いているうちに、CIEFLの図書館で一心不乱に勉強していたあの迫力で、10億以上のインドの人々が情報産業に乗り出す姿が目に見えてきた。日本は太刀打ちできるだろうか、と心配になってしまう。

そんなことで、インド旅行では、日本の行く末を案じ、ちょっとpessimisticになった自分であった。

新 刊 案 内

Language Policies and Language Education
—The Impact in East Asian Countries in the Next Decade
Ho Wah Kam and Ruth Y.L. Wong (eds.)
Singapore: Times Academic Press
ISBN: 981 210 149 7

この本の第7章 (Japan) は、本名信行、田嶋ティナ宏子、源邦彦の共著。

新 刊 書 評

『異文化理解の座標軸—概念的理解を超えて』

浅間正通編著 日本図書センター 2000年11月

藤田剛正(常葉学園大学)

21世紀は多文化共生時代の幕開けと言われている。本書は日本が多文化共生社会に向うに際して青写真を提供するものである。モノ、カネ、情報が地球規模で動く、ヒトも国境を超えて移動する。現在、世界で、日本の全人口に匹敵する約1億2千5百万人が、母国を離れて外国で暮らしている。日本国内では、永住する在日韓国・朝鮮人約52万人を含めると外国人登録者だけで約169万人が居住する。

日本の地域社会は住民としての外国人をどう迎え入れ、「共生」していくべきなのか。本書はその基本構想論集である。共生の内容としては教育(外国人留学生、就学生)、労働(専門職、技術訓練生を含む外国人就労者)、それに結婚(国際結婚の配偶者)などが考えられる。

本学会会員である河原俊昭氏は本書で「歴史に探る異文化理解—「異人」の意味の変遷から—」と、「アジアが変える日本文化—国際結婚と多文化共生」の2論文を執筆している。評者は深い感銘をうけた。以下にエッセンスをお伝えして参考に供したい。

本書は多文化共生を齎す前提条件として、①自文化を対象化・客体化できること、②異文化に共感できること、③ステレオタイプから脱却すること、の3点を論じ、多文化共生社会を「異なる文化背景の持ち主同士の間で階層分化がなく、平等の立場から交流と助け合いがおこなわれる社会」

(p.265)と定義している。圧巻は前記の論文で、河原氏が多文化共生社会における国際結婚の意義を述べているところである。河原氏の多文化共生の体験にもとづいているので、説得力がある。

まずフィリピン文化の美質が挙げられている:①フィリピン社会は多文化社会であり、異文化に対し寛容である②フィリピンの人々は高い英語力を持ち、異文化への適応力が高い③フィリピン人は開放的で、鷹揚で、「うち」と「そと」を隔てる垣根が低い④フィリピン女性は意志が強く、はっきりと自己主張できる。

次いで、河原氏は日本人とフィリピン人の国際結婚の齎す効用として、①男女の不平等さが幾分でも解消されること②日本人が異文化に寛容になることの2点を挙げている。

このニューズレターの読者もご存知のように河原氏はフィリピンの英語に詳しく、大修館『英語教育』2000年8月号掲載の「アジアの英語事情⑤フィリピンの場合」では、日本の英語教育の為にALTとしてフィリピン人の採用を勧めている。その根拠を本書は明らかにしている。

編 集 委 員 会 か ら

モノグラフ第1号が発行となりました。今回はプロモーションということで、会員には無料で配布することになりました。第8回全国大会に出席した会員には配布しましたが、欠席の会員にはこのニューズレターと共にお送りしました。この

モノグラフ第1号は、非会員には頒価500円で販売しています。なお、第2号からは会員、非会員を問わず有料となります。モノグラフの頒価の計算は、1ページ10円とし、100円刻みとします。ちなみに、今回のモノグラフは約50ページなので、500円となりました。今回の発行に際しましてご協力いただいた会員には紙面を借りましてお礼申し上げます。

本学会では紀要の他にモノグラフも発行するようになり、査読者が多数必要となってきました。これまでは原則として理事にのみ査読をお願いしてきましたが、今後は非理事の会員にも査読をお願いすることにしたいと思います。その節はよろしくお引いただくようお願い致します。

事務局から

1. 学会ホームページについて

以前にもお伝えしましたが、ホームページが新しくなりました(<http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>)。情報をお寄せ下されば更新しますので、情報交換の場としてお使いください。

2. 第2回海外研修

来夏のインドネシア研修は、インドネシアの Central Java と East Java に行く予定です。名古屋商科大学のユー・ジニウス・サドトノ会員を通じて、インドネシア英語教育学会 (TEFLIN) に協力を仰いでおります。詳細が決まり次第会員の皆様にはご連絡いたします。

3. 第9回全国大会について

夏の全国大会は6月23日(土)に横浜の東洋英和女学院大学で開催を予定しております。研究発表をご希望の方は、別記の要領で要旨を事務局までお送り下さい。

冬の第10回全国大会は金沢経済大学で開催することが決まっております。フィリピンの De LaSalle University の Maria Lourdes Bautista 教授が特別講演をされます。

第9回全国大会研究発表者募集

第9回全国大会は、2001年6月23日(土)に横浜市の東洋英和女学院大学にて開催いたします。研究発表を希望される方(会員に限る)は、要旨(日・英どちらか)をA4用紙1枚にまとめて、4月27日(金)必着で、電子メール、FAXまたは郵送にて、事務局までお送り下さい。

CALL FOR PAPERS for the 9th National Conference at Toyo Eiwa University in Yokohama

The Conference Committee invites submission of abstracts for papers. Submission is by e-mail, fax or mail. Abstracts for papers should be no more than 250 words in length. The deadline is Friday, April 27, 2001. Please send it to the JAF AE Secretariat (address below).

他学会からのお知らせ

REL C International Seminar

Venue and Dates: SEAMEO Regional Language Centre, Singapore, April 23-25, 2001

Theme: *Grammar in the Language Classroom*:

Changing Approaches and Practices

For more information, please visit the website [www.relc.org.sg] or contact the Seminar Secretariat at SEAMEO Regional Language Centre, 30 Orange Grove Road, Singapore 258352.

(Fax: +65-734-2753, E-mail: admn@relc.org.sg)

The Third International Symposium on ELT in China

Venue and Dates: Beijing Foreign Studies University, Beijing, P.R. China, May 19-22, 2001

Theme: *China's ELT in the 21st Century: Theory and Practice*

For more information, visit their website at <http://www.elt-china.org/>

The 8th International Conference on Cross Cultural Communication

Venue and Dates: Hong Kong Baptist University, Hong Kong, SAR, China, July 24-28, 2001

Theme: *Communication and Cultural (Ex)Change*

For more information, contact Dr. Shiwen Pan, English Department, Hong Kong Institute of Education, Tai Po, Hong Kong SAR, P. R. China (Fax: +852-2639-7321, E-mail: span@ied.edu.hk)

The 1st SEAMEO Education Congress: Challenges in the New Millennium

Venue and Dates:

Central Grand Plaza Hotel, Bangkok, Thailand, March 26-29, 2001

For more information, contact the congress secretariat at [congress@seameo.org] or visit their website:

www.seameo.org/educongress

<編集後記>

今回はインドの CIEFL の Deepshikha Mahanta さんにインドの英語教育に関するエッセイを書いていただきました。また、第1回海外研修に参加された金沢経済大学の河原俊昭先生にも参加報告を書いていただきました。

ニューズレターへの投稿や情報提供をお待ちしています。

2001年1月31日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 榎木園鉄也

発行 (有)タナカ企画

事務局 〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25

白百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550 E-mail: tina2@gol.com

学会ホームページ: <http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Professor Hiroko Tina Tajima

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8525

FAX: 03-3326-4550 E-mail: tina2@gol.com

JAF AE's homepage: <http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239